類聚名物考

七十七

和書門
二七七九八 號
一一二 函
三 架
一六一 冊 類

内閣文庫
和 書 類
二七七九八 號
一六一 冊
二〇九 函
一一四 架

内閣文庫
番號	和 27798
冊數	156 (90)
函號	209 106

心情　一
同　二
同　三

類聚名物考

七十七巻

明治[illegible]四[illegible]寫

心情

よおこゝろ情く

帯此男女のなからひの あはれさ深きを そむきて 西土の俗

語小説にハ情竇とこの意を固おなり

日本政府圖書

かひ　かこゝろ

○拾玉集云
君かためたくひなきつまなれはかひこゝろなき如らん

異心　ことごゝろ

○古事記上介速須佐之男命答白云々故以為請將罷往之狀参上耳無異心云々

二志
○ふたこゝろふたおもひ似たり

○後漢書列傳卅八臧洪傳凡我同盟齊心一力以致臣節損首喪元無二志有渝此盟俾墜其命無克遺育

貳心　ふたごゝろ

○尚書　先君文武則亦有熊羆之士不二心之臣

○國語　戮力一心

○文選　褚淵碑文三仲宝公乃揔熊羆之士卒不貳心之臣戮力盡規克寧禍乱

あいてこそなにしきかん　花心

○竹取物語に　かぐや姫のいふよしをあつめて我許さんも

さして　なにしかきゆる　なくなくしきるゝはなくさめとふらう

とそなり

二

花心　あだごころ

○小町家集　○古今

色みえでうつろふものは世の中の人の心の花にぞ有ける

○後撰集二春中　花の下にて　菅原景後

たのめども常なき桜の花心さそふ風あらはちりもこそすれ

日本紀　俗言

さかりなる花の心を思ふにはうつろひぬ山ぶきのさかりをしらぬ

これもうつろふ花といふこゝろ

○新古今集　ちりきぬるをよしゆきせ　あきて　かくれなく

なりぬれは　女三宮より

へだてけるこゝろを　こゝろえぬ心の花ともいひつべきことか

○後撰集(於ゐ)　十八雑　ちりきぬるにもなりにけるが　まへるさう

われ村の女三宮のもとよりあひくぞけるおもひかへる

こそあらめいひおくせておりつるに　紀乃内親王

花ならぬまどへつみしおもむくなしくならやまにえし心の花の

○ちゝこん
明月記治承二年四月十九日相府来て志無我主の山之
故也と○梅子の執筆んていゝ字古くこの字を書て嫌せしとそ
是にも見ハ僻之　好の字まて書誤れる其の執筆の字につきてたしふ
ハ大知りひろめく

そむころ　深心

○拾玉集に勒句百首に夜
こゝやどの池のたち手まとむれいつかハ岸によせんとすらん

ふた心
○金槐集下
山はさけ海はあせなん世なりとも君にふたこゝろわかあらめやも
○六帖
山里やふもとの山のふた心なける人も室のこけるこの師

志づこゝろ　下ル　静心

○藤原清正集
何となくものゝさひしく秋の夜は月静さへと志づ心なき
○清原元輔集
花はさし時鳥もきく笛つし忍ひ忍ひめる心こゝろの風
枝正集
○源重之集
山里は暇なしこそは何くるゝめぐる人さくや志づ心なき
○源氏物語
多かる女のかぞへの涙のしづく
何となき風のやきしゝけの枯しよりて秋のこそ志づ心なき

○拾遺集六　哀

荒るゝより人をまつものは哀なるもの心の…こそ

○石山寺に詣けるに（ありける）かの寺を哀なるとて清市のはてや

まり思ひけれどもめぐる思ひてよるしかひかりなるらんとて

何と以て哀なるきその秋の夜を見ると秋のつらい見ん

○恵慶集

秋はものかなしき秋の風に哀なり

○赤染衛門集に　よりきまま

何きは修むもりゆかしく風に哀なるねをこそ見ん

いくへごころ

詠んは思（む）のつて　学心　おもひむすぼのんとは

○新古今集

せるかく何となく見えける山路のひとへ人をとはひとさかれ

○源氏物語桐壺　人のくちさがなさで藤壺の御方さまをたぐひなしと思ひきこえて

左衛門なる人をとこそ見め似る人なくしおはし

けるかなあはれ藤の君とぞ申しけるかなしつかれける人とは見えれ

とんもつかぬおなえのひとくをさるやうにその御ひとへのかはり

ていと若しきやうそにおはしける

たいしん

○紀貫之集

君かあたりしんのこゑ(ゆき)きくは松かえうしかはる浪かな

かよふこころ　西ん

○拾玉集

いそしきていつくはあれとなりゆかんかのふんのそこをきめ(の)こて

うきまこゝろ
維摩のこゝろ　読人
○紀貫之集に
あしかれは あさきり中ふきし花桜 をすきんと こゝろ あすし あるよ

さかのこゝろ
さかいは日本紀に依て考ふれは孝徳紀に事暇此云居騰作（コトサ）
柯と稱しを歯れらと志ゝしさ和いきむと いふに用ひ通
詞には不祥をいひてさけるといふ 契沖のあらひくもといへる
もとやうなるさるゝや 稲（云）を須賀さの紫に自ら（出）て
○藤原定家の集
世の花 咲まさ見すて る西かは さられんと なふ之きりに

つゝきこゝろ
つゝきこんの之
○六帖
ことつあよ つゝきんは 大海の 氣なりの 春の き ちるきこのふ

たまつこゝろ　激心

○後撰集十三　恋五
河ノ川のうかめのこゝろそたまつ心をせきそかねたる
よしの頭也

まけじ心　不負心

情焔記上　まけしんそまておろさきをしてかきけるこの代をまつれまそれさくそてまし

あらきこゝろ

○後撰集九　恋一　もん
いひつれハ心こゝろきゆくまきこゆる人なりと
よもへしらるゝ
いせの海につりする縄のあらきこゝろハ和そまされる

ゆかぬこゝろ

んなくかきなくうちとけつれなるをよみ侍くたゝおもひあまりて読
の所まうる紙に遣恋

拾玉 花 中 恋のひまゝきれはさりてまとは恋しまといさて
かへりまゐれはつゆにゆのあはれもあはれよそれよりおもひゆるて
かきりなし

たよるこゝろ

○後撰集 上 廿十恋 なきものゝ見をみえなる人の誰かあや
のまちよつかりける つかさにつかへせられて
一河伊 そもいとあはれなる人かなはみしてたゝおもひやるへき

うつしこゝろ 猶心

○古今集 恋四 よみ人しらす
いてひとはことのみそよき月くさのうつし心はいろことにして

○後拾遺集 恋四 大和宣旨
恋しさを忍ひもあへすうつせみのうつし心もなくなりにけり

○うれしき 古今集の記 忠岑 花をこそ ものゝ花ひらちゃし なそ
いうつし心も 何となく 何くれなき まれは

うつし心 現心
うつゞごゝろの語れまたハ ゆふつゝるんあらしたまへまゝなる
みゆづきれるといふれ また新によりて云る

○後撰集上
なちもひて 是なるゝゝ中よ何中まき なる事りたるとつけて
あかをと引ぬき くれハ 人にさらぬ 石田ぬき 矢をれば あやしけると
是光将らとすりてうつし心 破しくるふまりいまけてゆら
さてるんとなひけれハあの 何さるりてすきぬ
○蜻蛉日記 四 中 蘆葉冊にてあと何するこのうまるある苗のなき
てのうちかゝしもんりしそのといひろやくいふすそ 蘆あすつ
つしあるあるそもうつしんも おきすると
○同 七下 廿八日よ右 撲のすみより内よさふらひつまとよ うれしもの也へ
ぞそなんいそきてせめるなとて 人しこきけん御の新よまつりて

あんと申つりにけりとなふろうつしんをあつてのこ河了給

○古鏡第五かきりのさ倫にて都にのほる人のかきおこせよの人ハ人にあ
ひとなふ経る事に営業せるにおもよりをを作せるれ、内のへう
やまつるうつしつゝおりて作せらはらかと付ゆりくなまはおれるを

邪心　あしきこゝろ　みきこゝろなきこゝろ
なまきの訓まかこゝろともいへり

○古事記上尓天照大御神聞驚而詔云々伊都之男建[タケ]蹈建而待問
何故
尓速須佐之男命答曰僕者無邪心云々

ちかん　ふかきこゝろ

○古鏡第六　上古の志倭にはまとうちやんとせなひゝん伐来り
けるに荒農にいかゝして用意ありて石城の下にふ
見も土をはいぬいひけと　おかれたれやまなむ申しておとする
人にそ難後肥前肥後九州の人を起させ給ひとなへさるかよりて
社の内につりまつる人をきおしとりて世ておそしめのひかれゆや
つゞ方のちなとをいりておかりて給ける

○古鏡第十二　の営業のしあよしかるとて来りたや
うたゝかたよ仁し人なれハたるに人何にすりハちの子さ
経にてよかう申しなとつひてこのつまて合作の佳よいき
とりくれハ丁子をえんるをさ倫し包みておこせて
かつしのをとみしたるよの心さしをやまとんよみもしらや見ん
かつ
のうし
えうしめかつやまんにせんしもをえり　ませやらかうつれつき

さん心　さんのこゝろ

○新続古今集　釈教　後嵯峨院

こゝろえのいふをさとりとせしかども一すぢにまよふこゝろはいはれんなりけり

○三心私記云　以不仮心信仏本願方　往生足云三心

○指示問答　むかしを三心といへるものを別にさして三度申すべき
心生はいたずらに念仏ごころよ仏と称して一心に称名を
ひとへに名号を唱る人の心ぞ三心をそなふるにつけて三心
はそなはるなり

執心　しふちやくこゝろ

○拾遺云　冥途旅行あるれあそしましける信住まで　紀家　権大納言長家
執心の余まりに紀家なりけりやかくさけむしや　執心哉

浅き心　あさきこゝろ

○拾玉集六　釈教　釈教

今はたゞ浅き心はしられけりわがみのうへにかゝるなるらん

深心　ふかきこゝろ

○後撰集九　恋一　人女のもとにつかはしける

ことの川海に深き心のあらはせん何かは君を恨しもせん

○拾玉集 五 雑 秘哥云

はてのみよ深きこゝろは山の井のあさきにかへるならひなりけり さらん

○竹取物語上 かくや姫のいはく よくもあらぬかたちを深き心も

しらであだ心つきなば後くやしきこともあるべきをと思ふばかり

なり世のかしこき人なりとも深き心ざしを知らではあひがたし

となん思ふといふ

荒心　あらごころ

○古事記上 是以備如海神之教言與其鉤故自尒以後稍俞貧更起

荒心迫來將攻之時出鹽盈珠而令溺

○小除九代記六 昔一条院の御宇長保の比疫病大に流行せし

かば五月九日紫野にて疫神を祭りて社を立荒ぶる神を鎮めらるる祭

長能の歌に

今よりは何あらぶる神もしづまりて花の都もやすらかに

とよもしは今日のものの神社のまつり

○今案に 荒栗 生駒 家葉も出る時代は詞書も可

たまくふん
○万葉集中第五 恋
我恋は久細のいとよりのつるて縄ねよこそんやむ時しあし

はまちのん
○麦木抄 海雨 よみ人しらず
君かへん今夜のみつくろひの玉もとたえかね海る原の 満信卿抄

しらん いつはりしる

ぬすびとなり

○大鏡 第四 此后宮(村上帝)の御中の少将義孝(重)の君は

少将(そ)相なりその御まへは村上の御えらびにあそばしま

ほどの事にさるべき人きこえのおはしましてなり 何事にも仏道の

なりかくはさるひつじやあるはつかの法読をして いたく

しくおほしけるにや さて かなし

やとまことにせめ思ひくるしきつるごとなどもいとど新しくなりゆく

せたまひけり

しづめる心

○金槐集中 名所夏(本ノ)

奥山の岩垣沼に木葉おちて しづめる心人しるらめや

みづからきこゆる

綾心

○古今和歌集序 紀貫之 神代よりはじまりて あめつちのかの

みなもといつところなき(云)その葉 吹風の露にそよぎてちる

葉の露とたまにまがひけり 結ぶ

非常心　ひごろのこゝろ

○大鏡第五に太政大臣の御子なり今の仁和寺別當紀師元
せい元堀川院の御末かぎりなき大臣にてひごろの御心ぞ
かくはかばかり末代の御ためかくましける東三条殿を故
なき事よりも御つぎ御ことてもなほおもへるいかん申けるに
故之天性も御心もおもはかりてもなし人をとゞ

こゝきれぬん
○瑞相記四巻 曲おもてまたのゆく人形足れて すれはきこえしの
あり可それおもしく東らみるてつきなきるんをいかさりてま並て
くりへ

あかるきまよひこゝろ

○蜻蛉は花上に遊ぶ年月はつもれども世をもあかぬ身としてあそふ
かけろふは花二遊ふ　まてはかくても残るものなき残花
いとんなされ
あかるきまよひの心なるかけろふの花とみえし

心は絵工のごとし

○華嚴経 夜摩天宮品　心如工画師能画諸世間　悉従生無法不造

人の心は山川よりさがし

○荘子十列御寇　孔子曰凡人心険於山川難於知天

心意識

○竹窗隨筆 三筆 講者數輩爭論心意識不決予乃為稽諸文（古）殊同（問）経云心者聚義意者憶義識者現知義倶舍論云集起名心籌量名意了別名識密嚴経云藏是心執我名意取諸憶境為識如是等說皆小異而大同者也永嘉云損法滅功德莫不由茲（茲心）意識是故教乘中須一一究審不可混淆宗門直措心源則一念不生全體現又何必瑣瑣分別爭論為也

心性 象燭談二

腹心

○春秋左氏傳 昭公廿六年 敢盡布腹心

糞心

○說苑 孟子曰人知糞其田莫知糞其心糞田莫過利苗得栗（粟）糞心易行而得其所欲何謂糞心博学多聞何謂易行一性止淫也 建本

寒心酸鼻

○文選 高唐賦 宋玉 感心動耳 又腸傷氣 孤子寡婦 寒心酸鼻○

注 李善曰 寒心謂戦慄也 酸鼻〻酸淚欲出也

甘心

甘ハ心にうけがふこと我いふ苦辛なとの味ハ口にもうけがく

うけハ我甘 味ハよろこびく合ふ如くんにあまなふ我いふ之

○白氏文集 廿六 被老相催雖白首 与春無分未甘心

野心

○春秋左氏傳 宣公四年 令尹子文曰 諺云狼子野心 ○昭公廿八年

○文選 与陳伯之書 丘遅 唯北狄野心 倔強沙塞之間 欲延歳月之命耳

用心
○前漢書七十八蕭望之傳今陛下以聖德居位思政求賢堯舜之用心也
○文選　籍田賦　潘安仁　展三時之弘務致倉廩於盈溢固堯湯之用心而存救之要術也

○旅宿
○拾玉集七　秋旅
うらさびる紀路の浦波になれして旅ねせぬよもちのみ代

ミゝりごゝろ　私考
ふのとりミゝくえひらくかゝもちまとりのちぎりきゆく
旅ぶりおくしきの葉ひろく聞しえし

○源氏物語　桐壺　以袁四の宿
ことにつけても　いかしくきいはなき面をえつゝもかる物かや
おきくつにえぞゝみよろん
行き風のやきこし旅のの乱しきこと旅りくゝてこしつ何をみなき

心情 弐

心かへ

○古今集　　　心語

心之へ　きゝてよのまゝ

ぬえいかんと　我と人と　見語るものゝあるなきのもの一句わかして

めかしへ恵慶法師の集に　忠見の

俳之　ことのものゝ忠見の歌ぞうつりてそぬる

とみへし　られても　けりて　その行しまき之

歌廿四　　家集　　てる待

○

かりそめも心をかへてやらまし　代りにのをかにやちもなみなし

心かも

○恵慶集　　心替

秋風に　かきなすことのこゑにさへ　はかなく人のこひしかるらん

心当

○源氏物語少女　にほひあへて

○夫木抄四　光台院入道親王家五十首　雲花　光経

心当にそれかとそみる桜花かはらぬ雲の峯の夕くれ

○後撰集八　冬

心あてに見ハこそわかめ白雪のいつれか花のちるにまかへる（たかイ）

こゝろづき　心付
心つきなきとハ心に叶ぬ也

○後撰集十　恋二　人の許よりかへりまうでくる車を見て心づき(不)なく侍りければ人もこそ見れ聞えければ心づきなかりけるおとこの許へ
まかりてつかはしける
人妻に心あやなくかけはしのあやふき道ハ恋にぞ有ける

心ち也　こゝろかく
人も見ぬまに心をとめてみせけれど浦(?)にてもえとこそ
聞えのかへりごとにおもへぬハみとけれるとぞ

○伊勢集
心よのかくえてかくれぬめる見えぬハ心をきても思ふべきらぬ

○後撰集十二恋四　つれなくて見えぬる人の恋人不知
つらしとや思ひはなれて身を御身の心の中にハ思ふとぞ思ふと

心遣　こゝろやり

心ばやりけるよしそらひ捨るの意にて問（かんがえ）てみるにいづれ
申しおひやるも万葉集の此のハんとなるけるならむ縁そ後
の先儒の意ハ見えし後のハおもき其句のするかひそら
る意ありて右等の意にまかせむへし

按ハ夜　寄　　清人右京　○云々

夜の見ゆ流し山の草のちるやちりの露にぬるらん

心癖　こゝろぐせ

○大鏡第四巻にて此（村上）帝の御中宮ハ右大臣師輔公の御
女にておはせしかのつま村上の御子を [illegible] まゝ
此御女の心いとつよくおはしましけるよしを [illegible]
見えしに（縁）よりかく御心つよき御流儀して [illegible]
御心もやけ給ひいと心つよき御心癖おはします [illegible]
おほかたハせめやさしきめでたき御心にてやさしきひ
とり

心操　こゝろばせ　河海抄

○後漢書廿九王符傳少好学有心操

○源氏物語椎本　そこはかとなくかきならしたまへるひゞきの琴の音
かたちありさまのめでたかりしかど心操のほどいとめでたくめでたく
なりしを思ひ出るにおなじ

○檜垣女集　西德にや
さだめなき人の世のまゝにいかでこゝろばせこそすぐれたれ
あとはかなくきえなむとぞしらぬ
んとせらるれたへかたくはあはれなり　何もこゝろのし
んにて　こゝろばせ　愉快
わがみにしりたる心ばへにて愉快の意をみつべし書紀に
ことよきのさかしき物語文之

○花集　新古今
かぎりなきほどをあらはすかたちなれ　我こそはさりともや
○源氏物語
しらずよのなかのことはりをしらでせんかたなきおもふまゝにやは

○清輔奥義抄字宿所のみなよりまし　多くは人のつまにてかの急似を
やれにいひて世にみえてかくしこゝろさとりて待りきけれ
ありしに物語ともかく待るも何の河原へとありしにかくえ
なりしていきてきもとのつくり出ものかふかの袖まくの人もひよ
なかの佛ものさまに待るといひ定めて京へ河原へおあひ
てんかのひたりくめきあひてくまれにまつり

遺響　後京極殿勝之書遺響　遺跡となる同しあとの和
甘ん　韻會情[illegible]之　人の条

露命　後中のいのち
○人の身を露の命といひなしつひに出家人に如見之なり　○宝物集　作者保信
此かへの命を露にたとふるハ草村さん讃人不知かんなりなり　同

こゝろだえ　人[illegible]
人たゞせよ何よれ[illegible]の気是人つきとさ[illegible]何をりんまでと
いふ何ゝる哉も[illegible]

○源氏物語　桐壺　桐壺帝　源氏
いときなき御ほどにてひとゝなりきせはおきまゝる結ひとめつや
御心のうちにたのみかうろのさせたまふ
○増鏡日記四帝中云忘に[illegible]ありて[illegible]のえに[illegible]てやとて
[illegible]かゝる行を[illegible]なるとの心そえ者しまとめてさいそひ
るかゝつるすと
○大鏡　[illegible]とて[illegible]ハさけ[illegible]の心ねとて心るこ[illegible]くるせ
のかりえ[illegible]てまうらひのひし[illegible]

しんいぢ
　くわいぢとろきなといふも愚痴の煩悩之と云ふともさハあら
　しいぢうやまきの意なるへし
○大鏡五　右大臣兼通関白職譲おはしける時御気色をいと
悪しくて左府の除目行ひにまゐり給へるなりとて御覧して
関白をハ頼忠の左大臣にゆつりとりて少一条の済時の中納言を
とたねるみしきて御前宮にまゐりて東三条殿を治部卿になし奉
えていつて後その日て極るまふせのひしそくしんいち〔ち〕そおはせし殿
あてさへ限りにおはせしにのちさん間にまかりて申させのひし
記事入まてもなかりしてなりけり

しんらき　一条也　後撰集

しからひ

しん施〔弛〕
人の世を思ひとき秀をふ付るハ人の為てあるをなるなり
さいへ見の〔本ノ〕池をとりふ中ひるやきふ人の縁てなるとふ
○僧都は紀にかやくよむはつふえりきとりれてあらせよ心
やうひるきなんこひしおりりよ
○同中　古悪は香とうちもりれて服食のくるおきてやのて前れ
てにとさしなるとのひえ尤くきえめてさひおひるなりける
年ひとされんん角らひなくしとえひつるとすてかく
あさ角ふなりぬいて記るおせのいて菩提かなへ向へ之と行ふ

29

心もとなし
何のさすつるへゆるれの流てさてかて満るれ同し
○土佐日記上 やまとおもふ海にて あるところにて ゆきてまちて
ゆうかてきこえ侍し下のは
神やせしきたまや我肩つもきらんとふん人の中をぬとてし

○心はへま
○中務集
あきの夜のこほりきても あるとも波んはれてきも 風のあらふ

心なぐさ　心慰
○後撰集十 恋二 返す せさりける女のみとかへりして
えはし
詠んれはん我ならは 濡らす袖には頼そそ 君の涙なれ
○同 詠とは身のあとなのはるし海とつれは 心ならず
詠ひみる人は堂なちるる我にて 中をなれやし心なくさみ
あへさるとある事にけらし
○今あまるん我にて なん 緒る慰めとも のしらく

○こゝろかゞみ　心鏡

○藤原元真集

かりそめのかゞみにあかぬ影の為るぬてるかけしらぬ也

○こゝろつかひ　心遣

○藤原仲文集

君のそふ心つかひをしら川のぬれ衣のこゝろみにそしれ

○拾玉集五

何となくなれぬ心つかひのかなしひ深くたえる人そはしる雲のかゝるの

こゝろがはり

○詞花集

かけてだに心は波の川の瀬をさやはうつりしやすくはなりぬへし　あらなみのまけ

○中務集

ちとせまで心つらきのてるれはかはるとこたへてまてこそこゝろの

○後撰集七秋下

年まれる程すてそぬ風の音は心かはりしや秋をとへるらん

○拾玉集二　北野勒一百首　祈恋

うきものこれ心かはりよあなかにかへぬ人をとはるゝにしよ

んこよ記

○ おか

若えするかゝあよ嫁か見てれつてゞ名湯の(?)

○

○ころをころ　ん踊

○若京元七ハ条のすりかへつ(?)

ひかくるみ

そこえきれつて桂(えしるイ)女郎でんおごりのやうせさらん

ん迷　こゝろのまよひ

心の迷ひせん(?)ぬ(?)

○深氏ある絹　相益法使のゆき(?)

るかるのつる

あさきハ湯絹もいそ(?)

まるひ　るふるもおがとつこられ

かれぞら

心宗　心鏡　心寛

ふゆの中にして其の日の光閑なるがめぐりうちちると
いふんさぎんときめきくるゝの裏之

源氏物語総角　若菜なよんなの中に物一ニなくき如えて残れぬる
るかりうす寄えありしに値残りくりまんのうらまで
まく

かれあひ　かれ

拾玉集六　雑百首
かれまかり　みなかりてうひしれ雪よりみしんなひと

かとさめ

こゝろさへむかふるいつまでもかれかじひんさゝぎの意之

○源氏物語総角　常ぞこの人なくて朝夕にまさき人のをおもひし
たちかへりかくふたりて見えてんとさめんかくあまれ

こゝろれ〳〵　　心二

○拾玉集一　樒
世をいとふる樒をしはて出てゆきん宿くゝもなき身となくハ

心けさう　心粧
○石源氏乙女　五節の当道ちひとせよみ政和の治賀ヲよまなせまし
あさりしおもハれて心ならむけさうしはちゝいふめり

心憎　こゝろにくき
○拾玉集二　百首　晩
夕まくれ宿ゆく人のなきものは我心にもまつこゝろにくし　憎
○源氏物語椎本巻への前栽のいとおもしろきさかりなるを御覧すみにてこのひやうにん心憎きかきりの女房四五人さふらひて世のつねの物語せさせのたまへり

心揺　こゝろさわき　心騒

○拾玉集四　神祇述懐

わかおもふ心さはきそせられつるなめのめさとこそ待ちらひよ

心輕　こゝろかろき

○為尹家集　夜

夜ふかきみ麻のさかりも深き人の心かろきとたちまし

○　枕八夜　好忠

心つから　我心からといふ詞

○うたゝね　紫式部の記にいとせめて深からん悩も、はや作るにいましてらんと思ひ立ぬるまゝに川ほいとあはれ仏の御のうち知られ一言葉より事訓おしるかはさへれて我もしきかゝしてんつからのなやましきもかゝへしなんとするあはれ

○伊勢物語集　男

かけていふ浅瀬川の瀬をさやまんつからやまさるかれん

人劣

○撰集抄　女　こゝろおとり

宇佐のみやしろに詣て太宰府の人者見給侍

りし事ありそのかみ世をいとふ所を尋ね侍りて二年也と思ひ侍き

撰集抄には世をいとふと聞しはおもひしにはあれ是又

て女はおとりたる人をあなどりけるは

君知らぬ人の世の末いはれせんかたなき信なりけれ

人つきなし　　世俗付

人つきなきは世におもひをいふ詞也

○情瑠璃記にいはれいかなといひなす事ぞの下にあふと忘ひ給ぞ

ときん付あるへし

心のおくしき

心のうちのしらるゝ紙にかける也字をのせしあきらかなる
紙のうへに心の行き(行き)をかきあらはすの心よくしるする也
といふ也

○晴蛉日記中 さらぬ禅の声しらん心そゝろにてひ高き雨音
風さえふけるにいつこの心を問これは雨の人の心をいふ也
それふかきこの頼のもいと哀にきこゆるきいひ続し(ひつき)我おそれ
さいかしこなるつまにも出ぬれはたりひていくあめもそめてせ
のこころもかへしは家務書に心のおくしきるうきこひける

こゝろおくしき

心のおくしきといふ

○拾玉集一 日吉百首 雑
神の代やぬさの山をうつの浦風に心おくしきもろのかとの家

心はやかき

○後撰集十 恋二
人妻に心はやあくかけたらしのはやうきとものは恋にそありける
よそへ人しらす

人麿系　こころなき

春雨ならひとめどもえ名かふしおをいふんなき一とふ物に

さそはぬもいふ

○赤染衛門集中にむすめの方に親王の門にけふ人のおしそめ

片田はつとめて　男

さしてまいれ人をいへてつて八重むくらん物をあくなきいへ

ん訓　こゝろこ侍りひ

ん字ん訓ハ如出の書まゝ見え

○蜻蛉日記上 かくこそてハ人まも松もん訓も侍るもあつめかしも

のゝやうなれハまとつりとえひつ

○大鏡中 内大臣をこれちらして見舞ひめ奴よさうつき人ハ

さうおりはん訓の紙けう陈ゆきなも二十三巻あめとおかえ給ハ

ん音まある

係あるなり

○源氏物語 総角巻

宮ろの銀の条比女位もんを左て之ち人へそなき

いときめく

いめてあ時よりつゝきと云如風の時も雨の時そのこのはまあるを

にあくは春めく秋めくの類ひおそそのこれこゝも

そのこかましきことゝいつかの如し

○源氏物語紀いときめきする物よき競物ひきてひとりあ

たる

○源氏若菜上傍人のいはなかるなる物ありぬ白ひなんとは物りの物

ありれゐつゝ衣裳まれきこ物れそ知るなりうえなる好まれ

ひまいいん時思ますて物すく

いらゝき　短慮

○後撰集九恋一いみじういらゝきける人なりといひけれは

いせの海にたくてふも何するれく縄のたきいは我そまされる

いさかしい

○蜻蛉日記上さこはみいさかしいついさる中にえつるなま

あんねん十四五ともなる人あらん

心つくし

心の梅に強き兵之花の故　にかなへるもつてつかふといへハ　心強

こまごとよりはなしく強き者之利根を絶れて良とすれは

らふといひつかさを良者かよりしていふなり

○源氏物語細流　末摘花に心はへなれとなかのいかりつほねかうつ

らひとてきょなくたしかなくさむやうなるもはなれかたき也

○弄花抄

いはんもてつくつくしの世の中此人の心も花にそ在ける　○古今集

心肝也　こゝろを尽す也

物のいそきにて心つくしきことにや心肝の摧折までにつかふれんと

する中にもまさしき我つよくいへんとていふ之断腸なとといふ也

○源氏物語細流相童　菊の間にかゝりて無念とみゆる梅もの活花をまて

こゝろ結ゆへいしき我からる明使のあれきこの前哀のかへつ

みえたるかうしてうなんとそれはえてふましくなひのに気をたいは　命有白

いとゝ心若しくんきりも居る中にまなんと世待の是なひとき

んとなやまれ

悩心

○徒然草上さまなく露いそうてなもわ（ら）くけまとれ
わとこそはれおもしも南風うちつきてんはえまでしくちうさ
ぬそ楚ふおり行きまてよろ川ふきてんをのしえなやまれ

○王駕詩 雨前初見花間葉雨後兼無葉底花

○王荊公詩 春色悩人眠不得

ん

んおそれのしき

おそろしき銭侭ふハおそきくそもいふ（く）ちの人を悩さむく云
うち和をおそ清くかくふハあくでんやうされぬと侍れる銭
いふ之体ておそれかましきの云ことなり可恐人の云犯

○お説身ハ大かくその字ふハん（お）おそましき人のおそれするふや

ちくろしはらぬ

卯んちもはらぬ風ふんとこてろうもせぬの云犯

○後撰集十三こんをしひりけるちもあうなやはうらんいとこの
もいえすしてあうれハおきもあうくまをやてこの君ひりけるる
女のもとよりおそりくすきしくハといひて侍れれハ
いえてるふんはうその消風ふ云ふ悔のよるそこひくき

○心服
文選雪賦謝恵連鄒陽聞之懣然心服有懐妍唱敬接末曲

○心神
荘子胠篋篇 解心釋神莫然莫魂

心緒 こゝろのを

心緒 こゝろのを
○拾玉集ニ貞應元年四月十九日法皇かくれおはしてさうさうのこと
ミて翻前右大臣公経公の許へつかはしけるこれはおほしかゝりけん
むすほゝる心の緒こそよわけれ君ひとしとかはとけぬ世のなかのを

心根　こゝろのね

○拾玉集三　たゝ此ね(?)に六百首の内百首　寄名号念(?)

なかめする心のそこにあらはれてあはれの空の深く志けるなる哉

同三　文治六年五社御中ね(?)　釈迦(?)観経(?)遍す(?)し　次第

念珠弘法大師三　未至(?)誤ふ(?)隋(?)める(?)隋機(?)よりまきり(?)之

其たへる哉

さとりの光名ひくていのりえん心のねより花そさきける

西方(?)すゝめ中つくりけれ

西王母桃花始開向後

いのりつる心のねよりさく花はちとせまてかひある身とそなる(?)

心の色　こゝろのいろ

○拾玉集七　五首(?)歌(?)

吉野山花やちるらむあすのはれ(?)のけしきの水色をかすむにみえてしみ(?)ける哉

○心池　こゝろのいけ

○後撰集上恋三　物のいひわたりける男いひわつらひていひはなちてけれは(?)いかならむよにかなといひて侍りけれは　読人不知

小山田の苗代水はたえぬとも心の池のいひははなたし

心隈　こゝろのくま
続撰集十三恋五　少将内侍
人しれぬ心の隈はきえはてゝ猶なきなき残いつてそん

心の海
○後拾遺集序　前宗通後妻の　集の序ならひおくまて
心海よりもふかし

こゝろのおく　心奥
○拾遺集六　雑百首
世のありのがし山へ入にしこころあるこゝろの奥またえひとなかれ

こゝろのあき　心秋
○後撰集十三恋五　よみ人しらず
いつまでのはかなき人のことの葉か心の秋の風を待らん
○藤原集に御なれゝしはなしとせめて比頃袂にたふる思之よなれ行ことのこゝろえせ色はしみむすめみりとりて
見すれはいまの秋のつらされは我こそさくのなをこれ見て

心月　　　こころのつき

○新古今二十この意をあまねく心月輪といふ事を
人多く勧めて詠ませ侍りける　　僧都覚超
月の輪に心をかけし夕よりよろつの事を夢に見るかな

釈教　　　　　　　　　　　　　　　　記如法師
拾遺　雲はみな心のうちに住月の影のおもかけにハ
大空にかからぬ心のくもりぬれバ鏡のうちに住月かとぞ見る

○拾玉集六　雑
空ハ我心の月も出ぬらん夢のさめしやかぶれける

こころの野べ　　　心野

○拾玉集六　百首
春の野に心の理へとやかくに詠てつゆ思ふ春の野の
心のえて
思ひやる心のかぎりも末遠き狭山の霞こその詞なハ見ゆる

○拾玉集一日　百首　雑
夕されば野たなびかれかすむかハ心のえたもなきこえけれ
同巻　伊勢法楽百首　　　　　　　　　　　　拾
吹まにんのたゆやこれなとく春のにあとるたる北垣んるの
秋といへハ月より月にうつる世の心のえてハ秋の頃のそよ

心松　こゝろのまつ　心待

○夫木 雑六 松　堀川院の時百首　俊頼

松風ては心の松にかゝりつゝ荻の御衣に咲あみゆらん

心友　こゝろのとも

○拾玉集一 獣 雑(旋) 百首 雑

世をそむく心の友とおもふこそ我独 うれしかるらん

意馬　こゝろのうま

○玉造小町子　書詩智海心　法城意馬馳

心鬼

○心の鬼　こゝろのおに

自思見鬼

○栄物語　五色石第五　賊人心虚ゝ則心餒不打自招

○蜻蛉日記六下　くらう家にかへりてうちねたるを(門)つとめてうちたゝく

むねうちさわぎて(心)さめぬれハおもひの外にさありけるを心の鬼ハ

そらごとなりき前にさえありみそかにへつされてまやあゝんとえふ

人はさらけなんれをうちてみるにこそ見ひあかしけれ
○うたゝね 阿仏尼の記ニあるこのことを首ハいとをかしく物おそ
ろしきまでにすさみけり かくて泉式部陶りたなりぬは
なむつかしとおもひわれをせめてんの兒もなくなりしかれハ陶りな
んなしハさて好ぬ

人のうしく　仏浮

○拾玉集三　十題百首　河
なかとなく人のそこかくまでにたる加茂の河原の花の咲の

こゝろのそこ　心底

○拾玉集五

いたつらにいそかはかろかれなからへんかりそめなれとそこをたれ

のこゝよ

同六

何は世をすむ人はいとゝそれて心の底のうれしき

やすかるよ

心の山

○続古今集序蔵京　詠

そのの花にむかひ花木ことよ　咲てつひ

心の山をかきり言は言の葉のつかりて浮の海とある

心の宿　こゝろのやど

○拾玉集四　秋有双松岡柳下見宿中

庭の松よおのか精北風あらくて心の宿をそへしのそなき

心の垢　心垢

○白氏文集廿八　洗浪清風透水霜[水]邊閒坐一繩牀眼塵心垢見

皆盡不是秋池是道場

人のやみ　　心闇

○金槐集中　恋　寄月恋

月影もさやかにみえすかきくらすこゝろのやみのはれやらは

○哥枕名寄

わかのうらハ日光の山に雲やおふ心のやみにまよはす　修成

○万葉補集　この心しきとをあつまりていひけれハ○後撰集

人のおやの心ハやみにあらねとも子をおもふみちにまよひぬるかな

同

こゝろのやみのこれ剣に見えしかおもてさはこれにあひ

○源氏物語桐壺

くれまとふ心のやみもたへかたきかたはしをたにはるくはかりにきこえまほしう侍るを

○後撰集十五　雑一　詞書略

人の親の心ハやみにあらねとも子をおもふ道にまよひぬるかな　兼輔朝臣

○高内侍集

よるかへるきてたれ君ならん心のやみにまよひぬしつのか

山の月

〇夫木抄

思ひやる山の月や近からん　ゆきて千里の月を見るらん　兼昭

〇朗詠集　三五夜中新月色二千里外故人心

〇謝希逸月賦　隔千里兮共明月

〇月清集

あらためて山の月も隠れなく千里の外に雲のかかるの

山花　こころのまゝに

〇萬代集　花を見て　山田法師〇夫木抄廿四也

めづらしきもの(は)ゆきやなお山桜花の色にあくかれ

〇拾遺集一　題不知　述懐

我ねがふ山の色をひろげはかなくも千代の春をながめむとよむ　清原小竹

〇玄玉集

いろ見へてうつろふ物は世の中の人の心の花にぞありける　小野小町

同

桜花とくちりぬともおもほえず人の心ぞ風もふきあへぬ

〇夫木抄三　春雑　前参議雅経　民部卿為家

何となく山の花ももろともに散るらむ春のやどりなりけれ

〇詠歌抄上　共詠　風も吹かば何へ散るらむ春の山の花にあれよとす

用ゐるに法を守りてその葉ともに忘れぬなりけり　我世の外

まねかれみるひとてあき人のこゝのれよりもまさりてうかり
きゝのあはれ
ん
○
○拾玉集一　慈
聞てたゝいはつゝたゝへきて苗ふれのうへはたえんを
こゝり
こゝろのうち

こゝろのうちこ
和泉
○千載集哀傷京極俊成
　よもしなしく詞の林若みのも絶えし
ちゝの道さかりまへちてんの家にし
○新続古今集哀傷京極
ともの花の林きれいまも絶えし
こゝろのうちこ
和泉
○拾玉集七　獣難召
あむすひ夜さへきこぬ氷こそんわかみよのうち
○続古今集哀傷京極
ちまの前みぬかれこるせとう行ひつ
清きおきてよ聞せかり麻の中のよもきのすき
をわることしく

こゝろのすゞり

不清浄のなかにて物に染心すゞしき事なく　心圓

〇洗紙菩薩上 菩ちにかきこもり仏のみちふかくすゝむるこそつましけれ

くらのまこゝろもきよまるところなれ

〇朗詠集　山寺更無俗物當人眼但有泉音洗我心

心の雲

〇文永百首　法印厳水

身ともに晴行(う)(い)て空ハ晴ても心の雲を風にはらはせて

〇雅延群狂集 附録　山寺晴風

嵐にもはらひまかせて 来ぬ心の雲やたれぬ宿人

心のたのしみ

○擬栞の 白氏文集 心足即為富身閑仍富貴在此中何必
居高位

おもはゞや心のたのしみ神ぞみちぬ高根の花の色もよし

心の心

○金槐集下 心のこゝろをよめる

神といひ仏といふも世の中の人の心のほかのものかは

心外の薬

○これは眼耳鼻舌身意の六根をいふ六根も六識もまんのけがさぬを神の薬族のつゝみとへこゝろ

○徒然草上 第十八つまびらかにいはく人はいろあらんをあるまじかりけるを ことにひろはるのこゝろをよんれ世をさへぎるへいんの外の薬まうでいれて俗どひやらく人をえまじ云言葉よその時にたゞひてさふりてんやはかれ

心の華をちらふ
○白氏文集卅六泉石磷〻聲似琴閒眠静聽洗塵心莫輕両片青苔石一夜潺湲直萬金
○心のうりよこゝろ　心念
○蔵京解怨集　女の歌
志る人や言にあらそ心ふかき心のうちの言なりけり

心のちり　心塵
煩悩の塵労をもしんとけがれとをりふ儒書にもおほく
佛書にもあり
○無量壽經上摑裂邪網消滅諸見散諸塵労壞諸欲塹　科
注　意云塵労即是五欲之境欲塹即是愛欲之心依境
愛起培坧衆生故云塵労

人の古宿

古宿に帰りてすこし州里家の奥をいふ今も田舎人はすこし
をこ古宿をいへりんの奥とのふ南に帰りをくらくして
物のかくれところなれハ人のすまいをいふも似る縁

○山家集
さりまでも人の古宿に宮こちえみていりて我身の色をぬるん

こころのみのる

○後撰集第七 秋下 兼輔朝臣たゞおなじこゝろにまへりける時菊の
陽明門にまかりて音にきこえたる菊の花をかりて同
の菊にて花人にまかりて菊より酒をかみてことひか
つかはしけるとて

秋の菊の花を引きたりける時に来て見そ忘れしき
同十九 難波にまかりける人につかはしける
かくれなきそんみのりてこかす人を浪にもとめよみえそれを

○後撰集七 秋
清かりし月みんの外りしよりより衰ふる身のかよひち

いとやさしき
○かのとはさとりよれとへいかの中のれのかのおもふところの
宮人の宿かりてねられぬきにいひあはせける
○探玉集四　五月雨に　　寂然
十枝之しもの花さけりつまにへらんのよ露あさてら九里
いとつゆさびしき
○續古今集　蕃苔ともし神のさかんしるを元てめぐの　　人寄
海わたをんよつかさとろ世をうけたれは往きそふれて前の月
日もと細のやさし
乙

○いとのりてみよ
○花集をもおもふほど女つれしへけるに　　○清縁
おきへつ我か袖まそせきとめる身にあしかなましとふへは
かへし
おつれつ色さそいかな事てこがるゝつき涙にもこあよふな見ぬもの
○同人
面かけはみなまきてもみつたやいかなものてあらめいをあとゝ
うつゝかなのってそれしあなうてふ恋はいてもつまつけしせく
○みゆれ人は
おくれぬとさんよありてこゝろなき涙かもてめよふあくかるゝ

○心をやる　　遣心

○紀貫之集に

おもひえたるいとけきあき藤の下葉につきせん人をこそ ゆる

○源重之集

うちえのひかとらんのやさしんうきせのすれ花にさそはれや

心をなくされ

○拾玉集ニ 僧正　百首　秋述懐

これの秋僧江ゆのゆきてさえ宿のの月をみるかな

心をつくる
おのしきをみて人の為をも悪くいひなしくるしむ
ことわりを致すること云
○源氏物語明石 世のいときかしこき人の心をまげてたはかりはらたち
をこの人なれて何まくさらずかきかんのうらみをおもひ見ゆ
ちそしにかくろちすてきえんをさあんちこるとれ

心をくだく
○文選寡婦賦 潘安仁少伶俜而偏孤兮痛切怛以摧心ハ

心をかくる
○史記八十四屈原傳 屈平既嫉之雖放流睠顧楚國繫心懷王不忘
欲反冀幸君之一悟俗之一改也
○後撰集十恋二 よみ人しらず
ひとあはん月のなきにはおもひおきてむねはしり火に心やけをり
心かけてたえけれどもいひつくんなるもあはつれなき心をしのべ
はれいつけける
ひとつのこ恋れは苦しふこゝろ数鳴おて君にきかせん

ころもをまくら

衣を枕とすることいふにて旅の異称とするの言にや　枕に

拾穂集十六　雑　つれなき名に立つれは　伊勢の

ちりそめし我名きよめん高麗の人の衣をまくらにかふ

○拾玉集にもお

同上　旅の恋　よし人しらず

涙にしる身の出さし語るくつなかくんをまくらにきて

衣をかへす

衣を裏にかへして二たびかへす事

○金槐集下

おや君のもとにまかりて父母にわかれぬる人にいとめる心

なとおくふる

○拾玉集二　百首

ことのはの松に心残すへしそみきとハ人にかくるなり

何を始めとする

和哥ハ人の心を種とするより おこれる言の葉末の露の地の中より

生ひ出る言の葉をいはゝ万葉二葉にもなる清(?)に十葉万葉のことく

はふきれたるなるへし

○ちかの集藤原(?)家　世をいとふ者ハひとつの心残種としてよろつの言の

葉とそなれりける

心と花にまかせて
○六百番歌合 春 志賀山越 十番右
春くれは志賀の山路を踏そめて人の心を花にまかせむ 顕昭
心師家集 拾玉集十二

三

中懐
○夫木抄六 家集 ちり花おもひ
家集の中 従二位家隆 ○壬二集
冬こもりや中の花をいつしかとえたる春の春子見たらん

君中涼風　新本拾遺集二
友

○とよさひのもり
○紀貫之集六　ころもより
春も来しおけハかれぬる秋風にさえのこまきさゝとよむ
ひの花
ケつし
しえんきんよりさく　あさひのもりの枝をたつゝづゑはたく

まなく思ふに
○金槐集下巻　寄石恋
おきつ島うのすむ石によるなみのまなくものゝ思ふに我ぞかなしき

ときそへ思ふに
○金槐集中巻　○新勅撰集
さゝきり磯邊の山の松の色はときそへて恋をおもふころかな

くだけてものを思ふに　碎物恋
○夫木抄八夏麦　百六十首恋中　好忠
山かつのあされ刈干る麦の穂のくだけて物を思ふころかな

なみにおもふ　並名
人なれはあさしえにほりぬんさる我のみ
〇夫木之玄集
木の山まゆをのこれのみて我をハなそにおもふなるへし
くもてにおもふ
〇後撰集九　恋一
うちわたしなかき心ハ八橋のくもてにおもふことハたえせし

おもひやる
おもひやる　心を　遣悶　これハ字の如くに我心のうれひを
外へやりなふをいふ也万葉集ニ人麿の妻におくれて
よめる長歌に吾戀千重之一隅毛遣悶流こゝろもありやと
へて集中こゝなその意にたか集によまれたることゝもを
用ひられ意これを是にかゝるの身代ニあらしき推量まる
我おもひやるといへる憑像のみにそもさよふまをとり
これらの語の意ひありその理にもそもてハむ
いふところなるのゆゑや
杜子美ヵ詩集に遣悶したるをやる遣興けるとやるの詩あり

○後撰集十七　雑一　詞略之

何ゆゑにかれかはせんかの江の浦鳥の子をおもひやるらん　中務

○宝物集一　おもひやる

多年におもひやるこそ悲しけれひとりや苔の下にくちなん　中納言[illegible]

○おもひやる

古人は思ひのまゝなるをえらけやすく思ふ[illegible]

こゝろ　唐の文に遺悶などいへるに同しこゝろを俗世には[illegible]

よりはなる残れおもひをはらさん[illegible]の言に[illegible]

○白氏文集に銷憂と見え又笑後義にも遺懐悶散なといへり

おもひなし

○人のまことひとゝなりてよかゝぬまもとゝろかしなんとなりと

たるを日のうちつけんまゝになとゝいふこと

○拾玉集一　郎[illegible]

いにしへきゝしを橋にかゝることゝ思ひはおもひなしにやなけれ

○源氏物語　桐壺　これは人の心をもまさりておもひなしめでたく

人も之おとしみそねみけれども何かぬをすみなし

おもひあかる
心を高くもちあかりていやしき人つかはさるなとのさまく
翺翔するに似たるをいふ騰揚の意也
○源氏物語桐壺 いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひける
なかにいとやんことなき際にはあらぬかすくれて時めき給ふ
ありけり初より我はとおもひあかり給へる御かた〳〵めさましき
ものにおとしめそねみ給ふ

おもひあかる 類聚 河海抄
思ひのほるかくおなしくて折れるを備ふるをいふ 源氏物語
の抄に思ひくくびる事也との意也といへるめり 河海抄の
告名は加へて言ふるれは仮名にたかふ也 中河思ひ居しぬる
と云詞あるもれは呉音自記府の言語なれは言訓にて交りてよ
とも云へりける
○源氏物語桐壺 靫負 生れし時より思ふ心ありし人にて故大納言いまはとなるまて
たゝ此人の宮つかへの本意をかならすとけさせたてまつれ我なくなりぬ
とてくちをしうおもひくつほるなとかへす〳〵いさめおかれ侍
りしかはそ

和かひとつのかる

述懐

○拾玉集四 百首日吉 述懐

君もきけこれそみひとのふるき法をひろめて人をたすけん

○後撰集十七 雑一 兼輔朝臣宰相中将より中納言になりてみの年賀

ふるかくちとのはにまてかれこれそひとをのみるついてに

兼輔朝臣

和をひとつる

そひのおもしにうきおもきをそひさため一寸にもたらぬ

○拾玉集四 百首日吉述懐

ひとこえそひとつみしんみは物をむのるも身を つくしせん

同四 法楽日 百首

いかにせん人もをしへいぬ文の池のひもものの名ひとらきぬ

懐舊

○文選懐舊賦 潘安仁 ○注李善曰 懐舊賦者懐思也謂思於親舊而賦也

ふるきことをおもふを

思ひしまゐらせ、
限りある御法をいつまでか物の心得まし
○後撰集上恋 あひしりて侍りける女の心ならぬやうに見えて侍りければつかはしける 藤原後蔭朝臣
いつはりに立かくれつゝ見えしまでひとすぢなる人のなかやく
○拾玉集の 賀茂社歌 百首 雑 ○同 雑春
おしひ絵の心にならし なきものの代はそれにありぬべし
かゝる心をしらん

柳もひさる 忠規
よくえをとりなして せんりくるまを代もかへさずとにて代
こそとふひかきてむるをいやしんをそゑてし息を取持て
校しぬともいへむそれにかしくる忘め

おもひ餘

おもひいづ

人のむさぼれることをおもひあまりてひとへにゆるむことをいふ

朝敵の意也

○拾玉集七 貞応二年五月十六日法皇かくれさせ給ひてさこれける

殿前太政大臣經宗の許へつかはされけるかくなん

玉のをハむすぼれてのこやみるまゝにかくてもえぞおもひあまる　たえハ

おもひおち

おもひのたえちをせじはいつも同音の音語と云ひつる辞也　おもひ共　河海　相もふだち

○源氏物語 相並にても かぎりなき深きおもひとちまでなるところなひそ

はやしらなる川つきんちるんまでるそ

○出来抄六 建久元年にかなる 定家

おもふところ青のかくことにすこれつむ種原のまとの面そろなる

ゑひゐ　君寝

物をゑひゐるなり　いぬることなり　人す寝所再也

○拾玉集六　源秋篠(?)

かゝりのころは昔ことゝ寝乃[illegible]の枕まきてそなかしき

○後撰集十一　恋三　[illegible]侍りける女の国へまかりて　読人不知

ゑひゐの秋[illegible]あふも[illegible]かなしきものにてそ[illegible]

ゑひすへ花

○拾玉集七　繁茂　内衣裏

[illegible]ハ[illegible]ゑひくしゝ[illegible]らるゝ[illegible]玉を[illegible]

相ゑひこもる

○後撰集十一　恋三　平中興

[illegible]きもゑひこあ[illegible]人[illegible]侍る[illegible]なりけれ

名ひなた　名歟　和たひなる
名ひなたとも以ふなれ同しんのまなひそ名ひ可とゆふとハ
是和哥ひなりてあそもいふんをあし定むる之法之乃義ス
同し時あるなとそも其の例あまた
○拾玉集一　述懐
和のつらしとしむ人ふやなぬへきそえてひなたなてそわかれなん
○樗婦女集　その妻子に別いと見えてひなりて京子のあかりなんとそ
うつりその人の心をくちえるほもみあつる心もえんえそ
ひらりあくいつこし
○赤染衛門集一　秋ひとつひとりを問ふ来るとさかひて和哥し人
かりよくる今よそくよ我見せられハ世を秋風ふ和たひなられ

かくれなひ　河名

○拾玉集一　竹意

はるかなるよいとふしをしのひてこふらなかつくおもひとハこれをいはん

そひむ

○金槐集上冬　実朝

さゝなくて秋はけなくはいつの世のそひ出もなきさまをはなれん

ちくさにおもひくゝ様

心緒如乱絲なといへるが如く千種々の事をいふ

○蜻蛉日記上　我はたゝをみる情をかくきゝしれたるはいとあはれなること

かゝるにもそうつくろひかくさる人もなけれはいとゆゝしくのみ

なりゆく道をつらなく出さるはこゝにふかくそふらんなと

みつゝそひよらぬなかりなとかくにそひ入るとしけれと

いふはあからさの葉くらゆとのよもきよりもしけくあらそひ

ながむるよ

岩にかゝまり
○金槐集上恋
さ秋ふんて霜のつえさた玉の消ても我ハ岩にかゝまりてい

ありくそふつる　　思企
○大鏡第七 浄妙寺ハ東三条殿大臣になりたまひての後に木幡にま
うらせ給ひつる法性寺の定殿申しまゝせ給ひて法華するべきあくの
先祖の墓　おほすあるにかゝの御あつき殊にぬいとゝきまこ
我身にふさ南になりたまハ三昧堂建てんとほんのうちにそく
とこそうけるとこそハ建てたる

むかしをこひかねて　　狗焦　　蟄
むかしのかねもゝいふぬ年比犹が如くなる代いふ
後撰集恋二　　雪く
あくくもひのきゆるあかいと（と）そらくむかしハこかさらめし

○白氏文集卅六 賢人易狎　慤　女難禁莫慢焼
○紫式日記四中 足利かれ者あるひていみしらんやうる人にそさ清こけ
らまそみすてかゝる里信をしるく文かゝるめとみへつるなとハ
りりいひてむかしのこかはなきへいふうきうし何る者

こがる　焦

なきこがるゝ恋こがるゝなどいふハおもひのせつなるなり　字ハ

焦ハ火にて物の焼るやうなれば日の限つくす所をいふなるべし

○源氏物語桐壺ニて　小方ヘ相奇　鳥もなきなんとあきニ見れ玆

ひゝ諸相ての女の事ニ見えてひ字てこそ

くろちなき
　ちからなきをいふ哀ハあるへけれハいふひとへに頼むなとといふに
　勤へて知つり

○蜻蛉日記上　　きならの宮
　くろかねてみるもあかくき跡なくハ志ら手を繕んかくきなきかれ
まくら言
　くろもたのくふくやるあれ我のくる河海の塩のひとましあすくらハせん

念力
○阿含経　曰人五力佛果十方曰人五力者一信力二精進三念力
　四定力五恵力

念友　　まんまかくまて
　兄ひろへたとといふに聞し伝へられぬきこへて称兄ひろへし
　あるはふみ兄ひろへたといふなり称つよく学ゆるき道

○源氏物語桐壷　源氏兄弟のなにてきこゆるなら猶くをそくゆんなん若
　しけるなる我らつも消息御の見ましかハとおほしむるにたへかくしき
　をんつよく急しりへさせのみ

こゝもあくれたなる　世理ん戯
うゝハ意んをよあり意んもなくハ心わりぬきほとうんまうちつれ
なるといふ
○娃緑の紀中又云ハりりおそんの相てうりわハいと子婦子まき比
まれなんよさりそのせんまハりなどん相そろさるみあとろんちあ
きみとうえきこえれそものしゝえひたえぬるまうせろなくて
見えてうりあさ手しと見ぶみろうしもなく戯されハいとねこさに
こゝらの月ひぬん〳〵るを世らふまそ

暗記
○物をそらにおぼえて覚ゆる之書とて見えしてそらに読べし　そらおぼへ
暗誦ともいふ
○後漢書卅六應奉傳奉少聰明自為童兒及長凡所經履莫不暗
記讀書五行並下

意數

○これは尤今俗に胸算用（ムナサンヨウ）といふに似たる算器を用ゐずして
心にて算數のみをいふ也

○後漢書六十荀彧傳紹待彧以上賓之礼彧明有意數見漢室崩乱每懷匡佐之義○注數計數也

○得意　とくゐの高僧也

○今昔物語廿六　寂照清範　供の時よりとくひにてありけるに
ゆるされてなかりしてまかりけるよ

風月　ふうげつのざえ
花鳥風月につきて詩歌作文のさまにたくみなる方をいふことの
風月といへるは白氏文集にも見えたり
○徒然草上 第八十六段 惟継中納言は風月の才にとめる人にて一生精進
にて読経うちして寺法師の円伊僧正と同宿して侍りけり
○白氏文集　看雪尋花翫風月洛陽城裡七年間
○拾玉集四 白氏文集の句題 見
忍ふへしこころもしらぬ花と月と都にて見しも七年はへぬ

甘心　こころにあまなふ
○そのことをいみじとおもひてうけがひよろこびこころうけかふをさ
又甘んハあまなひけぬをいふ也
○後漢書 廿五 周栄傳 栄曰栄江淮孤生也蒙先帝大恩以歴宰二城今復得備宰士縦為竇氏所害誠所甘心
○毛詩　伯兮編詩
○徒然草上 第八十三段 竹林院入道左大臣殿太政大臣にあがり給はんになにのとどこほりかおはせんなれどもめづらしげなし一の上にてやみなんとて出家し給ひにけり洞院の左大臣殿この事を甘心し給ひて相国の望おはせざりけり

○本心

○西漢書九十二游侠郭觧傳　既已振人之命不矜其功其陰賊著於心本發於睚眦如此云○注心本猶言本心也

○潜夫論貴志篇夫竊位之人天奪其鑒雖有明察之資仁義之志一旦富貴則背親捐舊喪其本心踈骨肉而親便辟

本性　ほんせう　ほんぜう

○後漢書五十七黨錮傳　孔子曰性相近也習相遠也言嗜悪之本同而遷染之塗異也○注言人好悪各自本性遷染者由其所習

不快

○輟耕録十二　世謂有疾曰不快陳壽作華陀傳亦然

○河社　契沖　大和物語子

おほ江の岸のうつほくちはたえぬとも　あまのさらみんさり此了

さゞれ

此さゞれハ石をいひしせまきをいふ也　成形の石をうけていへり　おほかたハ

此詞これより神代紀よみ神性をかむさゞれとよめり　此性の字万葉に為性

といへり(あるに)

○万葉にさゞれとハきこえずといふ古言也　日本紀

うつさし

うつハ言にて内ハとのふ詞也　古点も腹をうつとよめり

○拾遺記中　世の中をあらしとおもひしてゐるハかりうつさひしたる

よの中をあらあらんとおもふわれまつりのまゝあれよあらハこそ君

かくこともあはせさらめ

○新千載集　秋上　法皇御製

かゝ衣つまふく風のおとすもむなうつさひしからる秋もまたなからん

○古今集

うらみる

うらハ哀んじうらふれどるなとハ人の初かく花おほしさ

滋るるとゝふ

○金槐集十忘

君に忘らるれを思ハ秋風になびけあさぢの露そけぬへき

○風雅集

同中 寄衣恋

○續後撰集

忘らる身ハうきうそれぬ加ら衣きてこそ身に名こそしれ

忍

しのぶ

無量寿経に三忍あり花厳経に十忍あり

○無量壽經阿難若彼國人天見此樹者得三法忍一者音響忍二者柔順忍三者無生法忍○科經上三卷卅一左以下具注

○華嚴經

一者音響忍二者柔順忍三者無生法忍四者如幻忍五者如燄忍六者如夢忍七者如響忍八者如影忍九者如化忍十者如空忍

智慧

○無量寿経下　如来智慧海　深広無涯底　二乗非所測

雲の峯　詞林拾葉　十二

夢路　〃　詞林拾葉　十

逆夢　さかいめ

世の諺にさかいめといふハ夢にみたる事よきハそのことかへりて
あしく夢にみし事あしきハかへりてよきことあるをいふ
すなハち文字もさかしまにしるせしよしなり

○莊子巻一斉物論　夢飲酒者旦而哭泣夢哭泣者旦而田獵方
其夢也不知其夢也夢之中又占其夢焉覺而後知其夢也且有大
覺而後知此其大夢也○注郭象云此寤寐之事変也事苟変
情亦異則死生之願不得同矣

○夢　いめ

○續後撰十二恋　西園寺入道前太政大臣
見てもまた我やわすれんとわれさへいひける夢のうきはし

○夢はかなや

○拾遺集十一恋一
夢よりもはかなき人をみしよりもあつまるはかなき人にあひなん

夢かたり

○小野篁集　夢語
ねてかたりし枕さへあはれはかなく夢かたりせし人をまつとて

出夢 まくいハ夢むるといふ也

○瑯琊代酔巻二十七丁 儺尓下引後漢書曰伯奇食夢凢使十二神追悪凶

○夢のうきはし

○紫式部 夢浮橋巻 夢浮橋

○後小松院 御製云

さめぬ夜のちきりのはてはうき河に見えつる夢のうきはし

○夢のたゝち

夢の中に見しことたゝちは直をいふ意なりといふ

○新撰六帖 為家 此

さえさえたる月かけの夢の中ひとりなかめ

さ夜ふけてなかく秋を過しつる夢のたゝちまさにもたのみなき

ハかりのうちに見し秋の夢ハうちわすれそこ

○九條内府恒集

ねさめよもねにはなれしをしはしねてハ夢のたえ〳〵ハいかゝやしぬらん

○壬二集　忘恋

忘てもひとりうちぬる夜半にわすられぬ夢のたちはなつらき哉

○夢のむすふにけり

○往事如夢　後光院覚寺

むかしてふことはいつかある夢なれはまた見もむすはぬ覚る暁

○拾玉集五

松の風の内きはえぬまくら枕に家のむすひもはてぬ夢の間さめぬる

初夢　はつゆめ

夢ハ節分の夜見るをもて正月元日の歌に見るを初夢と
いふなり江戸の俗正月二日の夜見るハ非なりといへり初夢の事
新拾遺集巻一新勅撰また玉葉集巻一にも山家集に
夫木抄巻一等に見えたり

○山家集

年くれぬ春くべしとは思ひねにまさしく見えてかなふ初夢
　立春の朝よめる
　おもひねのおなし題み吉野を出せり聞人の夢を

○五雜俎十三 季冬聘王夢群臣庶人献吉夢王拜而受之乃舎萌
於四方以贈悪夢

○夢想

昔の人ハ夢の中に神佛あらハれ人の為めに事を教へけれバ先をしめ
したるを夢想といへるにやさるよし也

○前漢書九十九王莽傳 莽又令太后下詔曰云々朕不身帥將謂天下何夙夜夢想
五穀豊熟百姓家給云々

○後漢書二十王覇傳 光武曰夢想賢士共成帝業豈有二哉

○文選 長門賦 司馬長卿 忽寢寐而夢想兮魄若君之在傍惕寤覺
而無見兮魂迋迋若有亡 注李善曰琴操聶政之妻曰聶政

出遊七年不歸吾常夢想思見之也

夢にいめ見える

○拾玉集曰　説　人生都是夢夢中欲然亦縁形
うつゝもはかなんのはかりなに夢にいめ見る事とハなき也

夢中夢

うた根の夢のうちにて見る夢ハいつれかうつゝいつれとれさためん　権僧正永縁

夢枕　いめのまくら

○金槐集上　梅花風に匂ふといふ事を人々に詠せ侍りし次に

梅か香を夢の枕にさそひきてさむる待ける春の初風

○松葉集六　海眠　夢覚

かり金の音るハ昔我思ひねの夢の枕にきくも悲しき

○大僧家積集

たれをかハ恋の山への時鳥夢のまくらにたのめしハなき

いめみさめし　夢見

○蜻蛉日記十一二　五月にこかはの御服ぬきれまさてなふさきくの如こあこにあると夜我夢にもの〻見へしあとしひてはあされまつてみへ〻さえて起えし夢のさとしはかられハちりふるいざしかあとて有つきのはつきれかく此ぬへり

見し夢をちぎ〻ひぬる秋のきれねりくきも此とむひゑぬる

波也

さして〻ハちりふる夢ハかくさめはてえわとかる事さへしき我

夢のちきり

○後撰集十三 恋　大にまかり通ひける女と忍ひてかくれかくれに成てまてこなたかなたにまかりけるといひせて久しうまからすなりにけりはかなくひとつのちきりもあらんとて夢のちきりもきこえなんかしとかいてつかはしける

○夢のうきはし

○続後撰十三 恋　〃情詞　西園寺入道太政大臣

うきもみな我やわたらんとわたりけさ恋わたる夢のうきはし

多夢　いめおほし

○北山醫話上　世有多夢人不論病健労逸閉眼則夢吾介皇有淫邪發夢之論然大率由心虚膽虚与蛔蟲所致也

○無夢　いめなし

○北山醫話上　至人無夢而愚者亦無夢酉陽襍爼云愚者少夢不獨至人問之騶皂百夕無一夢也酔人亦無夢見方虚谷詩評中瞽者無夢亦見酉陽雜爼

残梦　のこんのいめ

○唐王駕詩　馬上續殘梦馬嘶時復驚

○眉山早行詩　馬上續殘夢不知朝日昇

六夢　むつさのゆめ

○酉陽雜俎　夢篇云周礼以日月星辰各占六夢謂日有甲乙
月有建破今注無此文周礼逸○瑯琊代醉　容斎随筆　十四巻廿下

枳栗記三　十夢
此十夢の事撰擇直後抄四巻卅二右以下にも見ゆ　枳栗記右八迦葉佛
の文也　倶舎頌疏弟九等にもしくひとり

四種夢　いめのよくさなり
○善見律　夢有四種一四大不和夢二先見夢三天人夢四想夢
○出生菩薩心經　尓時世尊告迦葉波羅門　有四種善夢〻見蓮花成
○見傘蓋或見月輪及見佛像如是見已應自慶我遇勝法

夢のたましひ　夢魂
○藤原元真集
君こふる夢の玉しひ行かへり夢路をたにも我にをしへよ

はかなきゆめ　空夢

○後撰集十一　恋三

ときの間もうつゝを思ふなるそ　はかなき夢にまさりける

思寐夢　おもひねのゆめ

○後撰集十二　恋四

思ひねの夢といひてもやみなまし　なかなかなにゝ逢見そめけん

夢路

○藤原元真集

君こふと夢のかよひ路ひまもなく夢路をこそはゆきかへりつゝ

○後撰集十二　恋四

恋てぬる夢路にかよふ魂の　なるゝかひなくうとき君かな　よみ人しらす

同十四　恋六

こふれとも逢夜なき身ハ忘草　夢路にさへや生茂るらん

○拾遺集四　冬　同前　兼盛

一とせをくれむかへて夢路より　かへれハやかて春のあけほの

○同五　[illegible]

人の世を夢路に似たりといひても一つの袖や猶ぬらすらん

夢の通路

○夢のうちには夜ことにへ往来する通路をいふ

○拾玉集五　閑中抱樹　定家卿ノ兄未詳

君すまむ山の奥まで見つるかなうき〔き〕枕の夢の通路

○蜻蛉日記上

ゆきかへる　や　あつしにまどふよひかたをいふかを

夢さのこれ

夢を見たるさめて後月のなごりをいふ　残夢

○拾玉集四　百首自詠　鶏報

草枕かりねはねさめかちに鶏の明けて夢ぞのこりく

見えてぬらめ

その夢の通ひ路も絶えてそのぬる夜とてもさめてをる様なり　不寐見夢

○たかお河上なる　右京大輔明石の居橋は　侍従ゝ成

またあらし見ゆしかも夢の趣也見えぬ夢をえたるなりける

夢をちぎる

見し夢の行きといひてよきに成る緒ちぎりていふ昨夜

に夜月に枕にさして実平の上に夢ちぎる実平といふは恋と云

恩夢なりともこの節にてよきにちぎるともなる夢

ぐ見えける

○婚姻記上五月にこかるの風雅ぬきん出てみさきのことなくに

あとはる緒夢にそのしるし見くしあとといひてはなこにまかて

ぬるさえ恋に夢のさとしはかられはちかふるにさし如なとて

七月つきのいとはりきまにおく

見し夢をちきりへいひぬる秋の和比ねがさきし比と思ひそめぬる

ほかくり

○さしこえはちかふる夢はかくかくめれて社ねかひおさへうきと哉

○大鏡中の右大臣師輔　たゞくはみな家なれとある人はおはしまさぬ
すゑこそ行末のことなどもしろしめしてゐおくそおぼしけるも猶か
けることはいとまくらくおはしましけれ時夢に朱雀院のおほたちの足を西東
の大宮にさしやりて北向にて内裏をいだきてたてりとなん見えつると仰せられ
けるを御前になまさかしき女房のさぶらひけるがいかに御股痛く
おはしましつらんと申したりけるに御夢たがひて、かく御子孫はさか
えさせ給へし摂政関白えし おはしまさぬなりめり　又末の世の
に思はずなる事のありて帥殿の御事ともえかたりけれ
るなる事にていふはいみじき吉相の夢もあしさまにあはせつれは
たがふて昔より申し伝へて侍ることなり荒涼して心しらざらん人のまへに
夢語りな此きかせ給ふ人々しおはしましそ

夢あはせける
　夢見るとは何に似たる夢あはせたんじのまさに侍る人もきゝ侍て
　同様にかえてもろ夢解とかや因あること
○源信明集
　あるしよおもつかさの夢あつかひ八宮にはたる人のあらはるまし
○拾遺集
　夢よりもはかなき人を見そめぬるのは夢路にたる人もゆめちるあん
○狭衣物語
　うつゝにて夜をあかし　夢も見ハせよやさあらんほどもをしらやと
○大鏡中の右大臣師輔の条夜夢ちがふる条にあるべし

夢解　いめとき

人の夢をかゝる語そのよし恐を判する者を陰陽師のたくひ

よみへし

○晴明か紀州平らの殿の夢を語るに月と日を給りけるにひて月を八尺のうちにとゝめて見えたる名夢解に

そそやみへとりひとらいとうそれおそろしとえよる殿ひ

をこ　こちすれは人みえそせぬに時もあれ夢ゆえたまるその

事くるしう人のうへつえ問れはれいさく

○大隠牙五百段五十萬票のおそく　その後は夢解もかへるまし

かしこき者ともの侍りしそそよ陰陽の揃段のえ事なりし時に比

東三条殿つきそて天くめられさせ給ひていとかしこくおそれまし

し時に人の夢まかの陰陽殿より矢をおそれし東三條に射るをいかなる

そと見れは東三条にあたる殿ぬとつんたりまありてえひきとえさせ

給へる方より先夏せぬはし恐しきるあらんとえひて殿にも

申されは恐れ給ひて夢ときてる問せ給ひけれはいとよき夢

な之　世中の政殿に移りてあの殿の人のさかりに来るへきなら

見へたるとにはけるにあんざらはりしるにかは

夢見　いめみつ

○ぬるかうちに見るをのみやは夢といはん　はかなき世をも
現とはみす　壬生忠岑

○よしさらハ逢とみつるに慰まん　さむる現も夢ならぬかハ　中納言兼輔

○よしあしも昔の夢と見えなから　哉かくてや現ならし世や　夢　大江匡衡

悪夢　獏ニ喰ハスルといふ事

今世俗ニ悪夢を見れハ獏ニ喰セよとて獏といふ字を書て壓
するなり其の事詳ならす元来獏ハ白白き豹をいふ
夢を喰ふと見へす唯とも辟邪辟瘟のためなり

○白氏文集　明本卅九

貘屏賛并序　貘讀陌白豹也

貘者象鼻犀目牛尾虎足生南方山谷中寝其皮辟瘟圖其形
辟邪予舊病頭風毎寝息常以小屏衛其首適遇畫工偶令
寫之按山海経此獣食鉄与銅不食他物因有所感遂為賛曰
邈哉奇獸　下畧

夢ぢ　雅林拾葉八

○文選寡婦賦　願假夢以通靈

○雜體詩江文通　銷憂非萱草永懷寄夢寐

假夢通靈

○文選寡婦賦潘安仁　意惚怳以遷越兮神一夕而九升庶

而降兮情惻〻而彌甚願假夢以通靈兮目烱〻而不寢遠

○注李善曰陳琳神女賦曰儀営魄於髣髴託嘉夢以通

精

冨士唐崎子の夢

○雅筵狂集　雑武人の素より秋まての冒子冨士唐崎子　[illegible]

ま夢にて悦ひられハ讀てやる

見し夢の冨士より高く名を得たる唐崎の如く[illegible]なん[illegible]

恋人を夢に見るまじなひ

○袖無名抄 中巻 頭註 恋しき人を夢に見んと思へハ双陸盤を枕にして衣を返して寝の并普賢菩薩を念すれハ必夢に見ゆるよし或説に

いとせめて恋しき時ハぬは玉の夜の衣をかへしてそぬる

幸魂　さきみたま

○和名抄第二日本紀云幸魂 和名左岐美太万 俗云佐岐太万

○文章第八徴魂魄　問答魂有智兼精爽以載生體魄惟靈抱神

○明以通命　老子戴營魄之章可解

○玉籤拾遺 三 幸魂此云佐枳彌多摩奇魂此云倶斯美多摩嘉謂自問自答也此身与心一而二也處纂疏云幸魂奇魂者魂魄之名也口訣云幸魂奇魂者一魂而化之名幸魂者念而先臨而就奇魂者不念而成是即天命一身之主也嘉謂幸先同訓奇櫛同訓櫛解物者忽見自物則先知其自幸魂也然而知此物是何物奇魂也此亦一魂而化之象也釈日本紀幸魂奇魂私記曰問其義如何答幸魂是左支久阿良之無留魂也行矣是久遠之意也奇魂者城衛之義也言此魂守衛宮門之魂也私案今爰幸魂者是魂神也奇魂者是魄神也以元謂之奇魂若用魄字之條可叶本義歟又幸者行之義奇者久止之義歟

魂魄

たましひ

○清原元輔集
さくらちりけるをやめあへぬの桜見てそかへるたましひ

○藤原元真集
君こふる夢の玉しひ行かへり夢にをてに我をとへとよ

○後撰集 十二 恋四 消息かよはしける女おろかならすは見え侍りけれは
寐てぬる夢語りわれ魂のなかなかひなくうきそ悲しき

○山家集 夜
深き山の月をみて浮かれ出る魂のうちに心をそ見る人もなし

○ 光孝天皇 上人

[illegible]

○まゝおハ長恨歌ニ夕殿蛍飛思悄然　大宰大弐高遠
思ひあまり恋しき君か魂にかける蛍をよそへてそ見る

日本紀　やまとだましひ

○大鏡第二　左大臣時平　あさましき悪事を申おこなひ給ひし
罪により此大臣の御すゑハおはせぬ也　されハ日本紀なとハいし
見しゝ□□ましたるものを

○筆乘　古者魂魄或合而言之左氏心之精爽是云魂魄是也或分而
言之左氏人生始化曰魄既生魄陽曰魂是也大氐清虚則魄即為
魂住著則魂即為魄如水凝則為氷泮為水其實一耳

たま　　靈魂

○赤染衛門集四　皇太后宮にて世をそむきて四十九日の御佛の料の玉
とて人々にあつめしにまいらすとて
まつぬる玉ハ浄るかくれハ渡のこゝそ調かへる

うきたま

雲風

○早出岸集

ひとりぬる我しきたへの枕ゝ満ハうきたまにぬれやよかくし南し

たまきえ

舞絶　観臧

○小大君集

あかうし

ひとりゐのそてはたゑにひとしくてなき雲のかける我身は露草の
つゆのいのちもあまりきえてえあらぬそのきろこそけに

たまのを　霊緒

命をたとへていふ也玉ハ必おほかたに緒をぬきしおきれハそれを
命のかくれ譬へていひあはせり緒ハ人緒絢緒などいふくる
也緒すちの如くなれハこれにたとへし　又命珠とも玉緒といへることあり

○拾玉集七　貞応元年正月廿日法皇かくれさせ給ひてさこそこれ
ハる御前おもに経るの詩へかきこれハかくしかくなん
玉のをハむすほれてのこやとはまし　かへしこえり

○万葉集十　大伴家持
御世の長川のわかむたえてきくまよきかはなからぬまを

○堀河院太郎　百首　仲実朝臣
玉かつらはもの御子またともれ玉のをなかく　○未木抄同
さらぬ代てなかく

銷魂

○文選　別賦　江文通　黯然銷魂者唯別而已矣

たましひをけた

○ぬるたま　寝魂

○いせ集　かりものゝかたくろうつゝをひとりてふせるをとこ
思ひつゝぬれハ夢にも逢ふとてふぬるたまもこにほふと
君くぬへ

たましひのこと

万事の深きをいふ魂の深める人をいふ也

○大鏡巻五 昭宣公の大饗云 此殿ハ極よろつまこのひとつなるを和魂のかしこくおはしましけれハたくひなくおはしますなる[illegible]もおはしけれ 御魂あるおはしけてこそ [illegible] ものし給へる

心神

和名抄巻二神霊部云心神 未出 これはその何等[illegible]のの本文闕たる歟もとより本条なるか古人ありて[illegible]なる魂胆の霊妙なる所をさして神といふなる

靈　こたま　みかげ

これをたましひとよみて人の霊妙なる徳をいふ

○和名抄第　靈　四聲字苑云郎丁反日本記云美太万一云美加介又用魂魄二字

国立公文書館
National Archives of Japan